

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531110

研究課題名(和文)「日本」に関する「知」のフローを追う

研究課題名(英文)Towards a Critical Examination of Flows of 'Knowledge' on 'Japan'

研究代表者

岡田 昭人 (OKADA, Akito)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：60313277

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では社会科学を中心に「日本」に関する知識がいかに構築、再編、消費されているのか、量的・質的にそのフローをたどることを試みた。本研究を通して海外における「日本」の知が欧米の一部機関を中心に構築されていること、近年の日本のポピュラー文化人気に支えられ欧米の日本研究の需要は高まっていること、日本国内の社会科学と海外における日本研究との間に断絶がみられる一方、海外大学院卒の日本人研究者が架け橋として果たせる役割があることなどが明らかとなった。オックスフォード大学および東京外国語大学にて本研究の成果報告と国内外研究者の対話の場を兼ねたシンポジウムを行い、その一部についてウェブ公開した。

研究成果の概要(英文)：This research project attempted to trace flows of knowledge on 'Japan' with its main focus on social sciences through examining its construction, distribution and consumption using quantitative and qualitative approaches. Our research shows that English language scholarship on 'Japan' is mostly constructed within certain North American and European institutions forming its core, that demand for Japanese studies programs continues to be high due to the global spread of Japanese popular culture, and that whilst there is disjuncture between scholarship in Japanese social sciences and that within Japanese studies abroad, Japanese scholars trained abroad ('hybrid scholars') may play a vital role in overcoming the divide. We held symposiums at the University of Oxford and Tokyo University of Foreign Studies to report on our research outcomes and to provide a forum for dialogues among researchers in Japan and abroad, part of which discussion has been made available online.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：日本研究 高等教育のグローバル化 知の社会学 教育社会学

1. 研究開始当初の背景

「日本研究」という分野は、「外」から「日本」を捉えるという前提から、Japanology あるいは Japanese Studies という名のもとに主に海外の機関において発展してきているが、従来から社会科学において、日本を対象とした研究は周縁的に捉えられる傾向が指摘されてきた。一方国内では、留学生誘致につながる高等教育の国際化戦略として Japanese Studies プログラムを立ち上げる取組みが広がりつつある。そして近年は、海外で日本のポピュラー文化が「クールジャパン」という形で注目を浴び、人気を博している状況にあり、「日本」に関する知の商品化も起きている。こうした現状を背景に、本研究参加者はそれぞれの研究の過程において、「日本」についての「知」がいかに関海外教育・研究機関において構築・消費・再編成され、それが人文・社会科学においていかなる役割を果たしうるのか検証する必要があると考えに至った。また、日本研究に従事する海外研究者のキャリア構築過程を考察することで、「日本」についての「知」がグローバルなレベルでどのように循環・再生産されてきており、その中で国内の研究機関の役割はいかなるものかを明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、グローバル化時代において「日本」に関する人文的・社会的知識がいかに構築、消費、再編成されているのか、海外の高等教育・研究機関を主なフィールドとしつつ、研究や教育にたずさわる個人(アクター)に焦点を当てることによって、その循環経路をたどり、包括的かつ多角的なマッピングを行うことを目的とする。「日本」についての「知のフロー」を分析することで、国際化を迫られている日本国内の高等教育・研究機関および国内の社会学・人類学という知識市場が抱える課題が明らかになると期待される。具体的には、本研究は、日本研究動向についての質的・量的調査、海外に向けて成果を発信する日本研究者のキャリア構築過程に関するインタビュー調査、Japanese Studies プログラムのありかたについての質的調査を柱とする。

3. 研究の方法

(1)本研究においては、第一に質的・量的アプローチにより日本研究動向について調査を実施した。具体的には、日本研究学会におけるフィールドワークを行い、質的調査を進めるとともに、戦後の海外日本研究者・機関データや英語媒体雑誌に掲載された日本研究・社会科学論文についてデータを収集し電子化した。学会におけるフィールドワークは、European Association for Japanese Studies (欧州日本研究学会)大会、Anthropology of Japan in Japan 大会などで行った。量的調査

の海外日本研究者・機関データについては、国際交流基金により1980年代より発行されている日本研究ディレクトリの北米・ヨーロッパ・大洋州(オーストラリア・ニュージーランド)版を用いた。日本研究雑誌については、1938年刊行開始の Monumenta Nipponica (上智大学発行)、1998年刊行開始の Social Science Japan Journal (東京大学社会科学研究所発行)、1974年刊行開始の Journal of Japanese Studies (米国日本研究協会発行)、1981年刊行開始の Japanese Studies (オーストラリア日本研究学会発行)、1989年刊行開始の Japan Forum (英国日本研究協会発行)の主要5誌掲載論文について、著者・分野・所属機関・キーワード・日本語引用文献数などについて、10年毎のデータベースを構築し、社会学の American Journal of Sociology および British Journal of Sociology、人類学の American Anthropologist および Man/ Journal of the Royal Anthropological Institute について、1960年以降の10年毎の論文タイトルなどに加え、日本をテーマとした論文、日本人研究者による論文、日本語の引用文献数などにかかわるデータベースを構築した。

(2)本研究の第二の柱は、海外に向けて成果を発信する日本研究者のキャリア構築過程に関するインタビュー調査である。具体的には、日本人で海外に向けて「日本」について発信している社会科学研究者および日本をフィールドにして社会科学研究を行ってきた欧米人研究者を対象としたインタビュー調査を実施した。

(3)本研究においては、第三に Japanese Studies プログラムのありかたについての質的調査を行った。具体的には、英国オックスフォード大学日産現代日本研究所や、平成26年5月現在 Japanese Studies のプログラムを準備中の北海道大学国際本部などにおいてフィールドワークを行ったほか、本科研が中心となって数か月に1度のペースで定期的開催した研究会や、中間報告会を兼ねたワークショップ、最終報告シンポジウムにおいて国内外を代表する日本研究者や日本語教育者を招聘し、欧米各地の Japanese Studies プログラムの取り組みの特徴や学生数の動向、日本語教育との関連などについて具体的に情報収集および意見交換を行った。

4. 研究成果

(1)本研究の主な成果の一つは、海外日本研究機関のデータの電子化である。国際交流基金の日本研究ディレクトリの北米版についてはハワイ大学 Patricia Steinhoff 教授を中心に最新調査の電子化や統計的・歴史的な分析が進められているが、欧州や大洋州版を含めたデータベース化は本プロジェクトによる先駆的成果である。このデータベースに

より、英語圏における日本研究動向についてより包括的に捉えられることとなる。

(2)また、本研究の一環として、英語媒体の主要日本研究雑誌5誌の掲載論文の10年毎のデータベースを構築した。このデータの詳細な分析については今後の課題となるが、全体の傾向としては、東京大学社会科学研究所発行のSocial Science Japan Journal誌をのぞいた4誌の掲載論文の執筆者の大多数は米国、豪州、英国の研究機関に所属していることが明らかとなった。また、日本語文献の引用が大多数の論文である一方、日本語文献が一切引用されていない論文も各誌で掲載されていることが判明した。

(3)さらに、1960年以降10年毎の社会学・人類学主要雑誌掲載論文のデータベースから、日本をテーマとした論文が各誌約150~200本中1~2本にとどまり、「日本」に関する知が周縁化されていることが量的に実証された。また、数少ない日本をテーマとした論文の執筆者も、2本を除き北米の研究機関に所属していることが判明した。

(4)上記(1)(2)(3)のデータにある日本研究機関や教育プログラムの規模、日本研究論文執筆者の所属機関などを概観したところ、欧米の一部機関が海外における「日本」についての知の構築の中心であり、社会科学において「日本」に関する知が周縁化されていることが明らかとなった。こうした傾向については、本科研シンポジウム報告書所収のEyal Ben-Ari氏による論文においても指摘されているが、量的データからも実証されたと言える。

(5)上記(1)のデータベースに示唆され、本科研中間報告会を兼ねた日本研究ワークショップ(2013年3月14-15日)において調査報告されたように、1980年代はとくに北米において経済的関心から日本研究が発展をとげた一方、近年は、日本のポピュラー文化人気に支えられ欧米の日本研究の需要が高まっていることが明らかとなった。この点については、本科研シンポジウム報告書所収のPatricia Steinhoff氏による論文において詳細に指摘されている。

(6)海外に向けて成果を発信する日本研究者のキャリア構築過程に関するインタビュー調査からは、海外日本研究者と、国内の社会学者との間の学術交流の希薄さが明らかとなった。海外日本研究者の多くは、日本における調査を実施中日本国内の高等教育機関に所属するものの、周縁的に位置づけられる傾向にあり、積極的な紹介者の存在がなければ個人レベルでの学術交流が限定されていることが判明した。そうした状況の中で、海外大学院を修了し、日本をフィールドとす

る日本人研究者(「ハイブリッド研究者」)が、日本と海外の学術界の狭間に置かれジレンマを抱える一方、国内外の「日本」についての知の架け橋として多大な役割を担う可能性があることが示唆された。

(7)上記(1)~(6)などの研究成果について、英国と日本におけるワークショップとシンポジウムの開催を通して、国内外の研究者や広く一般に向けて示すとともに、「日本」の知の構築や再編、消費にかかわる者の間の対話の場を創出した。2013年3月14-15日には、英国オックスフォード大学日産現代日本研究所にて中間報告会を兼ねた日本研究ワークショップを開催した。本ワークショップでは、北米における日本研究動向について長らく調査を実施してきたハワイ大学 Patricia Steinhoff 氏、豪州から英語圏における日本研究を長らく先導してきたラトロブ大学 杉本良男氏、日本を代表する人類学者の東京大学船曳建夫氏らによる基調講演を中心に、日本研究のこれまでと今後について、欧米や日本からのあらゆる世代や研究・実践分野(文学、宗教学などの人文科学、政治学、社会学、人類学などの社会科学、日本語教育など)の研究者や教育実践者が集結し、対話を深める機会となった。さらに、2013年12月27日には本科研最終報告会を兼ねたシンポジウムを東京外国語大学で開催した。本シンポジウムでは、本科研研究協力者のオックスフォード大学 苅谷剛彦氏や Eyal Ben-Ari 氏による基調講演が行われた。また、データベース・インタビュー調査の成果についての報告発表に加え、本科研研究協力者の市瀬博基氏の司会により、苅谷氏、帝京平成大学山下晋司氏(人類学)、中京大学ましこ・ひでのり氏(社会学)、ニューイングランド大学(豪州)高山敬太氏(社会学)によるラウンドテーブル・ディスカッションが開かれた。英国で行ったワークショップで日本研究について議論を展開した際にはその存在意義自体は問われることはなく、当分野が抱える課題に焦点が当てられたが、本シンポジウムにおいては、日本国内における「日本研究」という分野への関心の低さ、日本の高等教育と学術界の危機あるいは周縁性と内向性の問題に焦点が当てられた。シンポジウムおよび本科研プロジェクトの集大成として行われたラウンドテーブル・ディスカッションでは、研究者がそれぞれの置かれている立場から「日本」をどうアイデンティファイし、何のために、誰に向かって、何を問題とし、研究を行うのか。研究対象とどのような距離をとり、どこまで相対化するのか。日本の社会科学研究、および海外の日本研究のそれぞれの分野にかかわる研究者・教育者にとっての「グローバル化」の意味と今後の展望・役割について、国内外で社会学・人類学の分野で活躍されている研究者による多角的な議論が実現された。中間報告会ワークショップお

よび最終報告シンポジウムで報告された一部論文、成果報告や議論内容をまとめた報告書を2014年3月に完成させ、その一部についてオンライン(下記ホームページ参照)で公開した。

(8) 今後の展望としては、シンポジウム報告書に収められている論文とプロジェクトメンバー各自でおこなってきた調査の成果について、英文および日本語の書籍や論文として刊行を予定している。今後とも本研究を推進してきたメンバーを中心に、研究者それぞれがグローバルおよびローカルな文脈での自らの立ち位置や役割を自覚しながら発信を続けるとともに、異なる立ち位置にある研究者と対話を継続し推進していく所存である。今後の課題としては、日本研究機関および日本研究ジャーナル、主要社会科学ジャーナルのデータベースをさらに充実させ、機関規模、研究分野やテーマ、研究者のジェンダー、教育プログラムの編成などの観点から、より詳細に分析を進める必要がある。また、本プロジェクトでは英語圏が中央となり循環する「地域研究としての日本研究」に批判的あるいは分析的な視座を投入しているが、次に「日本」対「欧米」、「日本語」対「英語」という二項対立の構図を崩し、より多元的な知のフローを実現していくことが期待される。そのために、英語圏以外における日本研究動向についても同様のデータベース化や質的調査を進める必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

岡田昭人「公教育の市場化への対抗原理」『人間と教育』81号、2013年、51-57頁、査読なし

岡田昭人「新しい国際教育プログラムの展望と課題：東京外国語大学ショート・ビジットプログラム(SV)を事例として」『広島大学国際センター紀要』no.2、2012年、67-81頁、査読なし

笹川あゆみ「自社会・自文化研究に関する考察：ネイティブ研究者の意義と難しさ」『武蔵野大学人間科学研究所年報』1号、2011年、69-78頁、査読なし

〔学会発表〕(計 8件)

Yuki Imoto, Tomoko Tokunaga, 'Autoethnography from the borders of anthropology and Japan: co-constructing narrative of borderland experience among two 'native' female academics', The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter Congress 2014, 2014年5月15-18日、幕張メッセ
Okada Akito, 'Recent Trends in Japan's

Educational Policy and Equal Opportunity', German Association for Social Sciences Research on Japan Annual Conference 2013: Inequality in Post-Growth Japan, 2013年11月24日、The Japanese German Centre Berlin (ドイツ)

Sachiko Horiguchi, 'The Roles of JET Alumni in Scholarship on Japan: A Preliminary Study', Anthropology of Japan in Japan Annual Meeting, 2013年11月9-10日、国際基督教大学

Yuki Imoto, 'Unpacking the Meanings of 'International' Education in Japan', The Asiatic Society of Japan, 2013年9月30日、渋谷教育学園

Yuki Imoto, 'New meanings of 'international' education in Japan: making sense of diversity and new educational trends from social anthropological perspectives', NEAR Language Education Conference (招待講演) 2013年5月25日、新潟県立大学

Sachiko Horiguchi, Yuki Imoto, 'A Critical Examination of the Flows of Knowledge in the Anthropology of Japan & Its Implications for Teaching Anthropology in Japan', Anthropology of Japan in Japan Spring Workshop, 2012年4月21-22日、大阪学院大学

Yuki Imoto, 'The production of "Japanese Studies" in higher education: towards a reflexive, actor-centred approach', The Asiatic Society of Japan, 2011年11月7日、渋谷教育学園

Yuki Imoto, 'De-mythologising Japanese youth problems', European Association for Japanese Studies, 2011年8月27日、Tallin University (エストニア)

〔図書〕(計 6件)

Sachiko Horiguchi, Jeff Kingston, Paul Scalise et al, *Critical Issues in Contemporary Japan*, Routledge, 2014, 328p (223-234)

苅谷剛彦『教育の世紀：大衆教育社会の源流』薩摩書房、2014、361p

Takehiko Kariya, Yuki Imoto, Jenny Hsieh et al, *Education in East Asia*, Bloomsbury Publishing, 2013, 336p (153-174, 127-152)

井本由紀、ロジャー・グッドマン、トゥッカ・トイボネン『若者問題の社会学：視線と射程』2013、315p

Akito Okada, *Educational Opportunity and Equal Opportunity in Japan*, Berghahn, 2011, 218p

Roger Goodman, Yuki Imoto, Tuukka

Toivonen, Sachiko Horiguchi et al, *A Sociology of Japanese Youth: From Returnees to NEETs*, Routledge, 2011, 191p(122-138)

〔その他〕

ホームページ等

日本の「知」を考えるシンポジウム 2013

<https://sites.google.com/site/japansympo2013>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 昭人 (OKADA, Akito)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：60313277

(2) 研究分担者

堀口 佐知子 (HORIGUCHI, Sachiko)

東京外国語大学・外国語学部・研究員

研究者番号：30514541

プール グレゴリー (POOL, Gregory)

同志社大学・国公立大学の部局等・教授

研究者番号：60307147

井本 由紀 (IMOTO, Yuki)

慶應義塾大学・理工学部・講師

研究者番号：90581835

(3) 研究協力者

苅谷 剛彦 (KARIYA, Takehiko)

オックスフォード大学・社会学科および現代日本研究所・教授

市瀬 博基 (ICHINOSE, Hiroki)

東京外国語大学・世界教養センター・非常勤講師

笹川 あゆみ (SASAGAWA, Ayumi)

武蔵野大学・人間関係学部・非常勤講師